

# 作文過程における内省を促す支援の効果

高橋 薫

学位取得年月：平成22年9月

取得学位名：博士（学術）

学位授与機関名：お茶の水女子大学

【キーワード】第一言語作文、第二言語作文、内省、真正性

## 【要旨】

本論文では、熟達した書き手が作文過程で行っている内省（reflection）に着目し、作文の読み手や目的などの課題状況を意識化させるプロセスを強化した上で、第一言語、および、第二言語作文過程における内省を促す支援の効果を検証した。

【研究1】では、第一言語作文での支援の効果を縦断的に検証するために、日本人小学校5年生1名を対象に、意見文と説明文を書かせる単一事例実験を行った。その結果、作文過程における内省を促す支援は、産出する文章の質を向上させること、与えられた作文の課題の要請に応じて、書くべき内容を取捨選択して書くようになることが示された。

【研究2】では、単一事例実験の知見の一般化を試みるために、日本人小学校5年生を対象に、意見文を書かせる横断実験を行った。その結果、実験群は統制群よりも、課題の要請に応じた質の高い意見文を書いていることが確認され、【研究1】に沿う結果が得られた。

【研究3】では、第二言語作文での支援の効果を検証するために、台湾人上級日本語学習者1名を対象に、単一事例実験を行った。その結果、書き手は産出する意見文の質を向上させ、より高度な論証を行っていることが明らかになった。

【研究4】では、単一事例実験の知見の一般化を試みるために、上級日本語学習者を対象に、意見文を書かせる横断実験を行った。その結果、統制群の意見文は明確な論拠が示されていないのに対し、実験群は主張を支えるデータを示し、データの出所を示して主張を展開していることが確認され、【研究3】に沿う結果が得られた。

以上の結果から、作文過程における内省を促す支援は、第一言語作文においても第二言語作文においても、産出する文章の質を向上させる可能性が示された。また、内省を促す際には、作文の読み手や目的を意識化させることの重要性が示唆された。そこで「真正なコミュニケーションが行われる学習環境下において内省を促す支援を行えば、書き手が産出する文章の質が向上するだろう」という仮説をたて、【研究5】

【研究6】では真正性の高い学習環境下で、そのように作用するか否かを確認する応用実践研究を行った。

【研究5】で対象としたのは、アントレプレナー教育を通して言語力の育成に取り組んでいる公立中学校の実践である。同中学校の実践では、真正の読み手や聞き手に向けて、文書を作成したり、プレゼンテーションを行ったりする活動が組み込まれている。1年間の実践の前後に同一のテーマで意見文を収集し、書く力の変容に焦点をあてた被験者内の縦断研究を行った。その結果、事前テストから事後テストにかけて、生徒は書く力を向上させており、論拠に基づく主張を展開させるようになったこと、反論を想定し反駁するなど、より高度な論証を行うようになったことが分かった。さらに、実践後に実施した言語力の伸長に関するアンケートからは、生徒は自らの書く力や話す力に対して自信を深めていること、また、作文やプレゼンテーションの目的を意識したり、読み手や聞き手を意識するようになったことが確認された。

【研究6】では統制群を設け、同一テーマによる事前テスト、事後テストの他に、異なるテーマによる遅延テストを加えて、被験者間の縦断研究を行った。その結果、事前テストでは、実験群よりも統制群の方が質の高い意見文を産出していたものの、事後テストでは逆転し、遅延テストにおいても、その効果が持続していることが確認された。また、統制群では、上位と下位の生徒にほとんど変化が見られなかったのに対し、実験群においては、下位の生徒が得点を伸ばし、上位との差を詰めたことが確認された。以上の結果から、設定した仮説が支持される結果を得た。今後は、第二言語学習者を対象にした研究に発展させていくことが課題である。

(たかはし かおる)